

# 大波羅遺跡

— 5次調査の概要 —

2011年

日田市教育委員会

## 序 文

大波羅遺跡は、日田盆地の東部の沖積地に位置している遺跡です。

本書では、平成20年から22年にかけて行いました5次調査の概要を報告いたします。

ここでは古代から中世にかけての建物跡などが確認されました。また、遺跡地の一部が低湿地であったことから、柱木などの木材や種実、花粉などの植物遺存体なども出土し、当時の文化や環境を考える上で大変有効な情報を得ることが出来ています。

さらに、今回の調査で特筆されるものとして、古代の所産である大型の方形柱穴が確認されたことが挙げられます。

このような大形の柱穴例は、市内では小迫辻原遺跡でしか見られないことからも、遺跡一帯が古代の日田において中心的な場所であったことが考えられ、日田市の古代史を考える上で大変興味深いです。

本書が、今後、文化財の保護や地域の歴史、学術研究等に大いに活用して頂ければ幸いです。

おわりになりますが、発掘調査から本書の作成に至るまで、御指導・御助言・御協力を頂きました多くの方々に対し、心から感謝申し上げます。

平成23年3月

日田市教育委員会

教育長 合原 多賀雄

## 例　　言

1. 本書は、都市計画道路 城町高瀬線改良事業に伴い、埋蔵文化財調査を実施した大波羅遺跡5次調査地の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、日田市土木建築部都市整備課から執行委任を受け、日田市教育委員会が平成20～22年度に実施した。
3. 調査にあたっては、日田市土木建築部都市整備課および地元の方々にご協力をいただいた。
4. 調査区の名称については、本概要報告書内では、調査時のものをそのまま使用している。
5. 平成20年度は、A・B・B2区の発掘調査を実施し、このうちA区およびB2区については、表土除去等・遺構等発掘・記録作成・遺物取上げ・空中写真撮影・現場管理を雅企画有限会社に委託し、遺構等の写真撮影は調査担当者が行った。B区においては、遺構実測は調査員が行ったほか、雅企画有限会社にその一部を委託した。調査現場での写真撮影は調査担当者が行った。
6. 平成21年度は、C・D区の発掘調査を実施し、遺構等発掘・記録作成・遺物取上げ・現場管理を雅企画有限会社に委託して実施した。遺構等の写真撮影は、調査担当者が行った。
7. 平成22年度は、E区の発掘調査を実施し、遺構等発掘・記録作成・遺物取上げ・現場管理を株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店に委託して実施した。遺構等の写真撮影は、調査担当者が行った。
8. 本書に掲載した平面図の製図および遺物写真は、雅企画有限会社に撮影を委託したものである。
9. 本書に掲載した空中写真は、九州航空株式会社および雅企画有限会社に委託し撮影したものであり、それぞれの写真は九州航空株式会社に委託し合成した。
10. 大波羅遺跡5次調査により出土した柱木については、そのすべての樹種同定を株パレオ・ラボに委託しており、本書での柱木の樹種についての記載はその成果を参考としている。
11. 出土遺物および調査に関する記録等は、一括して日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
12. 本書の執筆は、IとIVを行時と今田で、III（1）を行時が、それ以外を今田が行った。
13. 本書の編集は、行時との協議をもとに今田が担当した。（敬称略）
14. 調査・報告にあたり、調査指導者のほかに次の方々に、来訪・ご教示・ご助言・ご協力をいただいた。

有馬尚子 石木秀啓 牛島茂 浦井直幸 井上義也 大坪志子 越智淳平  
片多雅樹 木本康廉 熊代昌之 高妻洋成 児島大輔 後藤一重 後藤宗俊  
小林和貴 佐々木由香 塩地潤一 清水重敷 白木守 鈴木三男 早田勉  
園田大 高崎章子 橋昌信 田中正日子 田中裕介 太郎良真妃 坪根伸也  
友岡信彦 西野元勝 能城修一 原田勝宏 原田論 比嘉えりか 藤根久  
光谷拓実 宮田栄二 宮田剛 宮本長二郎 吉田和彦 吉田寛

## 目　　次

I	調査の経過	1
(1)	調査にいたる経緯	1
(2)	調査の組織	7
II	遺跡の位置と環境	8
III	調査の内容	11
(1)	平成20年度の調査	11
(2)	平成21年度の調査	18
(3)	平成22年度の調査	22
IV	小　結	25



日田市の位置

## I 調査の経過

### (1) 調査にいたる経緯

日田盆地東部の丘陵下を南北に貫く都市計画道路城町高瀬線は、市役所付近を中心に頻発する交通混雑を緩和するため、国道210号線若宮町と慈眼山付近を結ぶ補助幹線道路として昭和44年に都市計画決定がなされ、昭和56年から改良事業が着手された。昭和62年には事業主管課である都市計画課から市教委に対して埋蔵文化財に関する協議が行われ、以後事業進捗に併せて随時協議や調査を行ってきた。

これまで城町高瀬線工事予定地内で本調査を実施した遺跡を列挙すると、まず平成2～8年度に会所山の北麓で会所宮遺跡（南からA～C区）の発掘調査を行い、主に弥生時代中期～古墳時代中期の竪穴住居・土坑などの集落遺構や、古代～中世の溝などを検出し、弥生土器や須恵器、土師器、土錘、鉄刀などが出土している。会所宮遺跡の北では平成11～12年度に大波羅遺跡（1次調査とする。北からA～E区）の発掘調査を行い、弥生時代の掘立柱建物・竪穴状遺構などの集落遺構や、古代の溝・包含層などが検出され、縄文土器や弥生土器、須恵器、土師器などのほか柱木などの木製品や瓦が出土している。特筆すべき事項として、古代の溝の埋土などから「山」「田」などと墨書きされた須恵器や土師器が出土していることが挙げられ、またこれまで日田市の内発掘調査による出土例がほとんど見られない瓦なども少量ながら出土していることもあわせると、古代に関して非常に興味深い遺跡であることが予察されている。

上記調査後、平成13年度までに国道210号線若宮町から日田高校交差点（上記の大波羅遺跡1次調査A区付近）までの区間が整備され供用が開始されたが、同交差点付近の交通量が増加し渋滞を起こすなど歩行者や周辺住民が危険な状態となつたため、本線をさらに北に300mほど（県道日田糸珠線まで）延長することとなった。

この延長部分については、平成18年度から事業開始予定である旨、前もって平成16年度に都市計画課（当時）から文化課（当時）に連絡があり、対象地が周知の埋蔵文化財包蔵地（大波羅遺跡）に該当するため、



城町高瀬線と発掘調査箇所 (1/10,000)

X=36100

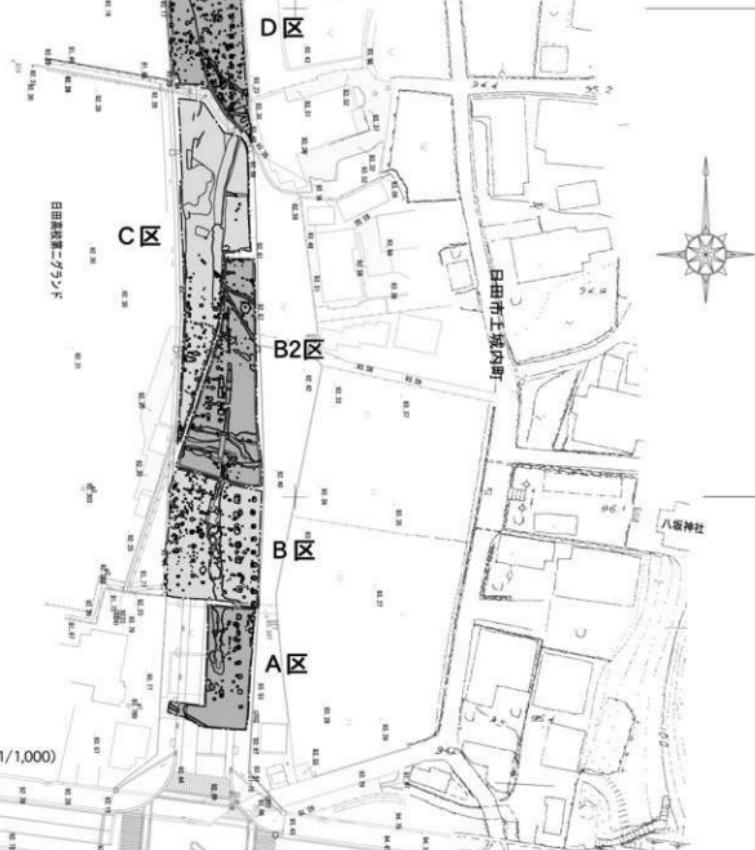


これ以後工事予定地における文化財の取扱いについて、事業の進捗にあわせて両課で協議を行っていくこととした。

平成19年度には、工事予定地の南端に近い部分の調査に入ることが可能となったため、その場所について平成19年12月6日に予備調査を行ったところ、現況の水田面より約40cm下で古代～中世と考えられる溝やピットが確認され、須恵器や土師器、青磁などの遺物が出土した。遺跡の存在が認められたことから工事前に本調査を実施することとなり次年度から調査に着手することとした。

今回この事業の実施にあたっては、対象となる範囲を、田・畑・宅地・学校グラウンドなど現在の区画に沿って、便宜的に南から北に向かって、調査区をA～

X=36000



各調査区の位置 (1/1,000)

E区と呼ぶこととした。

平成20年度になり、本調査の実施について両課で協議を行った結果、工事と予算の関係上、道路予定地を数回に区切って着手可能な場所であるB区の一部から調査を行うこととなった。この際、当初設定していたB区全体を調査に入ることが出来なかったため、B区の残りの北側部分はB2区として区分けすることとした。

B区の調査は平成20年5月22日から開始したが、そもそも地下水位が高く水気の多い土地に加え、梅雨時期と重なったことから、天と地両方からの水対策に苦慮することとなった。さらにこの水気の多さ故に柱木が非常に良好な状態で残っていたため、またこれら柱木が残る柱穴は一辺1mほどの方形を呈する特殊な構造物であったため、その図化・取上げに時間がかかり、同9月9日にB区の調査を終了した。

この間、8月27日に福岡大学名誉教授小田富士雄先生に調査及び遺跡に関しての指導を頂いた。

B区で重要な遺構群が認められたため、隣接するA区のどこまで遺跡が広がっているか確認する必要が生じた。A区はこれまで事務所や駐車場などとして利用されていたため予備調査を実施することができなかつたが、B区調査終了後に更地となつたため、平成20年11月18日からA区の、そして引き続き用地買収の終わったD区の予備調査を併せて行った。その結果、A区では工事予定地の東半でB区の続きと思われる溝やピットが、またD区では密度は低いながらもピットや遺物包含層が認められたため、これらも本調査の対象となつた。

本調査としては次にB区の北に隣接する水田（B2区）が調査可能となつたが、B区の調査において方形の柱穴列や柱木など特殊な遺構が見られ、たいへんな時間と労力を要したことから、B2区においても同様の状況が想像され、発掘調査の長期間による工事遅延を防ぐため、このうちに実施するB2区および



予備調査風景（平成19年度）



B区没状況



B区遺構検出状況



B区発掘作業風景



下村智先生・宮本長二郎先生  
来訪時風景（B区調査時）



小田富士雄先生指導風景



B区柱木検出作業風景

A区の発掘調査業務のうち表土除去等・遺構等発掘・記録作成・遺物取上げ・空中写真撮影・現場管理を外部委託することとした。

B2区の調査は、平成20年11月27日から開始した。この調査区もB区と同様に水気が多く、表土除去のために搬入した重機が沈み込むほど軟弱であったためこの段階から作業は難航したが、土に石灰を混ぜて水分を抜くことで対処した。作業を進めると、この調査区ではB区で見られたような柱穴列や柱木は続いておらず、この柱穴列の北限を区切る溝などが検出された。この溝からは木製品や木屑が大量に出土した。

A区の調査はB2区の調査と並行させながら平成21年2月17日から開始した。表土除去を行うと、やはりB区の継ぎで溝や方形の柱穴列が連なって確認され、同様に柱穴内には柱木が残っているものが多く見られたが、それらは調査区の中ほどより南では見られず、これより南側には遺構群が広がらないことがわかった。

3月9日には別府大学教授下村智先生に調査及び遺跡に関しての指導を頂き、A・B2区の調査は平成21年3月23日に終了した。A・B・B2区から出土した遺物は、3月26日に日田警察署長あてに埋蔵文化財発見届を提出し、5月11日に埋蔵文化財の認定を受けた。日田市教育委員会は、これら出土遺物の譲与の申請を10月23日に大分県に行い、11月4日に譲与を受けた。

なお、このA・B区で検出された大型柱穴列および1号溝については、道路工事図面との整合の結果、ほとんどが工事による掘削を受けないことがわかった。そのため、調査終了に伴う埋め戻し時には遺構面に石灰を撒き、さらに遺構面の約30cm上方にビニールテープを埋設することで、工事中または工事後の掘削時に遺構の存在を喚起するための遺構保護を施した。また当初の計画ではちょうど大型柱穴列の位置に下水道管が通ることとなっていたが、遺跡の重要性を理解いただき、遺構の破壊を免れるよう管路を変更するなど、市下水道課にも協力いただいた。

事業最終年度である平成21年度になり、残りの工事予定地の取扱いと工事スケジュールについて協議を進め、C・D区の調査とE区の予備調査を実施することとなった。E区についてはまだ現住建物が存在するため、それらに影響を与えないように小さな重機および人力でトレンチを掘削した結果、溝または流路とピット



B2区表土除去時石灰処理作業風景



B2区発掘作業風景



A区での樹種同定用試料採取風景



大型柱穴列の保護状況



下村智先生指導風景



予備調査風景（平成21年度）

群が検出され、やはり本調査が必要となった。

(行時)

C・D区の調査は、前年度調査のA・B2区同様に、遺構等発掘・記録作成・遺物取上げ・現場管理の業務を外部委託することとし、平成21年8月4日から着手した。

このC・D区の調査は、道路工事が南側から行われること、それに係る重機の進入口や廃土置き場の関係から、当初、北側に位置するD区から表土を剥ぎ、その土を捨りながら、次に南側に位置するC区の表土を剥ぎ、調査を進めることとしていた。

しかし、調査開始直前になって、D区の東隣で行われている工事との関係から、D区には8月中旬過ぎまで入れないこととなつた。このためC区の調査を先に始め、そのC区内において、重機およびD区の廃土移動に必要な範囲の調査が終了し次第、D区の調査に入ることとした。

C区の南側は、隣接する前年度調査のB・B2区と同様に低湿地であり、柱穴には柱木、溝には多くの木の類が遺されていた。その北側は、調査区東方から延びる低丘陵へと繋がる地形のためか標高も高くなり、木材など植物遺存体は認められなかつた。

8月下旬には、D区の西隣において行われている工事の関係から、それに伴う資材搬入や大型車輛を用いた作業が終了する見込である10月末以降にしか、D区の北側部分の調査が実施出来ないこととなつた。

9月3日、C区の空中写真撮影の終了に伴い、D区の調査開始にあたって、その北側の調査にすぐに入れない範囲を確定するため、工事側と協議を行つた。その際、D区北側の調査に入れるようになるのは11月中旬以降となる旨伝えられた。

D区の調査は、9月10日から実施した。並行して実施していたC区の調査は9月15日に終了した。

D区では、事前の予備調査の結果に反して、多くの柱穴が確認された。さらに、調査区の東端においては、A・B区で見られたような方形の大型柱穴群が1列に並んで検出された。

D区の南側の調査は、10月下旬にはほぼ終了し、10月30・31日には別府大学教授下村智先生に調査及び遺跡に関して、前年度に引き続き指導を頂いた。

11月16日には、予定通りD区北側の調査を開始し、同26日に終了した。C・D区から出土した遺物は、12月2日に日田警察署長あてに埋蔵文化財発見届を提出し、12月14日に埋蔵文化財の認定を受けた。日田市教育委員会は、これら出土遺物の譲与の申請を平成22年10月12日に大分県に行い、10月18日に譲与を受けている。



C区発掘作業風景



C区柱取り上げ風景



D区遺構検出作業風景



D区発掘作業風景



下村智先生指導風景

平成21年度が最終年度であったこの事業は、12月には道路工事自体を平成22年度までに繰り越すことになった。E区の調査についても、工事等の関係から、年度内に調査に取り掛かることが困難となつたため、平成22年度に実施することとした。

E区の調査においても、遺構等発掘・記録作成・遺物取上げ・現場管理の業務を外部委託し、平成22年6月16日から着手した。

8月17日に空中写真撮影をし、9月3日に調査を終了した。E区から出土した遺物は、9月8日に日田警察署長あてに埋蔵文化財発見届を提出し、9月17日に埋蔵文化財の認定を受けた。

平成20～22年度に実施した調査により得た出土遺物等の整理作業は、平成21年5月20日～29日、9月1日～12月25日、平成22年6月1日～平成23年1月18日の期間に行つた。なお、出土遺物のうち土器類（土師質土器等含む）については、バインダー処理を施した。

また、この大波羅遺跡5次調査地は、部分的に低湿地に位置していたこともあり、多くの自然遺物を得ることが出来た。これらについては、平成20年度にA・B・B2区の柱木やB2区の2号溝出土の木材等の一部を樹種同定し、平成21年度には、A・B区出土柱木を用いてウィグルマッチング法による年代測定を行い。平成22年度には、A・B・B2・C・D・E区の柱木やB2・C区の2号溝出土の木材等、E区の井戸出土の加工木など樹種同定、B2区2号溝より採取した試料を用いての花粉およびプラントオパールの分析、B2・C区2号溝より採取した試料中の種子・果実の同定、そしてE区出土の土師質土器内及び外面付着土壤を試料とした種子・果実の同定および植物珪酸体分析などの自然科學分析を行つた。

(今田)



E区発掘作業風景



E区実測作業風景



樹種同定用試料採取風景



小田富士雄先生來訪時風景（E区調査時）



ウィグルマッチング法による年代測定試料採取風景



炭化した種子を多く含む土が  
入っていた土師質土器（E区出土）  
左が4号土坑、右が5号土坑より出土

## (2) 調査の組織

大波羅遺跡5次調査の調査主体は日田市教育委員会であり、各年度の発掘作業と整理等作業の体制は以下のとおりである。(なお、職名・氏名は当時のままである)

### 平成20年度（2008） 発掘調査

調査責任者 合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）  
調査統括 原田 文利（日田市教育庁文化財保護課長）  
調査指導者 小田富士雄（福岡大学名誉教授） 下村 智（別府大学教授）  
調査事務 井上正一郎（日田市教育庁文化財保護課 課長補佐兼埋蔵文化財係長）  
田中 正勝（同専門員） 塚原 美保（同主査） 行時 桂子（同主査）  
調査担当 行時 桂子（同主査） ※A・B・B2区調査及び予備調査担当  
調査員 今田 秀樹（同主査） 若杉 竜太（同主任） 渡邊 隆行（同主任） 矢羽田幸宏（同主事）  
発掘作業員 鍊元 正隆 河部 松子 小下 一 五島 紗代 五反田静子 後藤美知夫 財津 利枝  
筒井 英治 中島カズ子 平原 知義 本松シズエ 森本 紗子  
※発掘作業員の直接雇用はB区調査のみ

### 平成21年度（2009） 発掘調査・整理作業

調査責任者 合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）  
調査統括 原田 文利（日田市教育庁文化財保護課長）  
調査指導者 下村 智（別府大学教授）  
調査事務 北村 羊（日田市教育庁文化財保護課 主幹兼埋蔵文化財係長）  
河津 美広（同専門員）  
塚原 美保（同主査） 行時 桂子（同主査）  
調査等担当 今田 秀樹（同主査） ※C・D区調査・整理担当  
行時 桂子（同主査） ※予備調査・整理担当  
調査員 若杉 竜太（同主任） 渡邊 隆行（同主任） 矢羽田幸宏（同主事）  
整理作業員 佐藤みちこ 中川 照美 平川 優子

### 平成22年度（2010） 発掘調査・整理・概要報告書作成

調査責任者 合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）  
調査統括 財津 隆之（日田市教育庁文化財保護課長）  
調査事務 土居 和幸（日田市教育庁文化財保護課 埋蔵文化財係長）  
中鶴 美穂（同副主幹） 塚原 美保（同主査） 今田 秀樹（同主査）  
調査等担当 今田 秀樹（同主査） ※E区調査・整理・概要報告書作成担当  
行時 桂子（同主査） ※整理・概要報告書作成担当  
調査員 若杉 竜太（同主査） 渡邊 隆行（同主任） 矢羽田幸宏（同主事）  
整理作業員 石松 裕美 安元 百合

## II 遺跡の位置と環境

大波羅遺跡5次調査地は、大分県日田市大字北豆田字塚原および今村に所在する。

日田市は大分県の西部にあって、九州全体でみると北に偏った中央内陸部に位置しており、行政区では東に玖珠郡玖珠町及び熊本県阿蘇郡小国町、同南小国町と、北には中津市及び福岡県田川郡添田町と、西に福岡県うきは市及び同朝倉市、同朝倉郡東峰村、同八女郡星野村、同矢部村と、南に熊本県阿蘇市及び同山鹿市、同菊池市と、6市4町2村と境を接している。また、周囲を阿蘇・くじゅう山系や英彦山系の美しい山々に囲まれ、これらの山系から流れ出る豊富な水は九州最大の河川、筑後川となる。筑後川の上流にあたる玖珠川、大山川、花月川の水は、日田盆地で合流し、筑後・佐賀平野を貫流しながら、有明海へ流れ込む。

市域の中央やや北寄りに位置する日田盆地は、現在市街地となる。日田盆地中央部のいちばん低い80メートル～100メートルの底部は三隈平野と呼ばれ、この盆地底の沖積面周囲には、阿蘇4火砕流の流出により形成された溶岩台地が継り、さらに内側の一段低いところの標高約150メートル内外の段丘がほとんど水平に連なっている。また、これら段丘上は、吹上原、葛が原、佐寺原、城内原など、原（はる）と呼ばれる。

大波羅遺跡は、日田盆地の東部の沖積面に位置しており、遺跡地の東側には城内原など丘陵が展開している。今回の5次調査地は、周知遺跡範囲の北東部にあたり、いちばん北側の調査区は遺跡範囲の北端となる。また、標高91～93メートルの位置にあり、南北に展開する調査地の北側には、東から西方へと延びる微丘陵が横切り、



大波羅遺跡5次調査地遠景（北より）写真手前中央の交差点から、北に延びる道路予定箇所が調査地



大波羅遺跡 5次  
調査地遠景（東より）  
黄色囲み部分が調査地。



A 大波羅遺跡周知範囲 B 慈眼山遺跡周知範囲 C 佐今原遺跡周知範囲  
1 大波羅遺跡 5次 2 大波羅遺跡 1次 3 大波羅遺跡 2次 4 大波羅遺跡 3次  
5 大波羅遺跡 4次 6 慈眼山遺跡 1次 7 慈眼山遺跡 2次 8 慈眼山遺跡 3次  
9 慈眼山遺跡 6次 10 慈眼山遺跡 5次 11 慈眼山遺跡 6次 12 慈眼山遺跡 7次  
13 慈眼山遺跡 8次 14 美術堂山古墳 15 丸尾神社古墳 16 赤道遺跡  
17 健城跡 18 日田条里兔矢地区 19 日田条里大原地区 20 月隈櫛穴群・永山城跡  
21 永山市政所跡

周辺遺跡分布図 (1/25000)

その南側は一段低く低湿地となる。こういった低湿地の含まれる今回の調査地からは、柱木などの木材や花粉などの植物遺存体を得ることが出来ている。

大波羅遺跡の存在する地域は、古代律令下には『豊後国風土記』に伝えられる日田5郷のうち、日田を支配した日下部氏の拠点である敷編郷に属していたと推定されている。また、遺跡の北方には、中世に約250年にわたり日田を治めた大歳氏の居城である慈眼山が聲えている。

遺跡は過去4度にわたって発掘調査が行われていて。1・2次調査地は、今回の5次調査地の南に位置し、1次調査では弥生時代から古代の遺構が検出され、それ以前のものとしては縄文時代後期後半から晩期の遺物が確認されている。弥生時代では溝や土坑、そして後期の遺物がみられ、古墳時代の遺構は溝やピットで、そのほとんどが中期のものとみられている。遺構が最も多く検出されたのは古代の所産のもので、掘立柱建物跡や堅穴状遺構、土坑や溝がみられる。時期的には8世紀～10世紀に当たられ、特に「田」・「山」等の

文字が書かれた墨書き土器や瓦が出土したことは注目される。2次調査では縄文時代晚期の土器や溝や溜井状遺構、井堰状石列が確認されている。なお、これら調査地のすぐ東側の丘陵には、日田地方の總社的存在である大原八幡宮が鎮座している。3次調査地は2次調査地の西に位置し、古代から中世の掘立柱建物跡や溝などが確認されている。5次調査地の西に位置する4次調査地においても古代から中世にかけてのものと推定される掘立柱建物跡や溝などが確認されている。

大波羅遺跡の北隣には慈眼山遺跡が展開しており、これまでに8度の調査が行われている。3次調査では中世の遺構や遺物とともに古代の戸戸や墨書き土器等が発見され、官衛関連施設の可能性が指摘されているものの、これまでの調査では15・16世紀の掘立柱建物跡や戸戸などの遺構や遺物が多く確認されている。遺跡の北側丘陵上の慈眼山山頂には11世紀から15世紀中頃まで日田を支配した大蔵氏の居城とされる大蔵古城跡が残り、慈眼山西端には平安時代末期創建とされる永興寺があり、木造十一面觀音菩薩像をはじめとする国指定重要文化財の仏像群が安置されており、中世大蔵氏の繁栄が窺われる。この慈眼山の丘陵裾部から展開する慈眼山遺跡は、大蔵古城の城下として整備されていったことが今までの調査で想定されている。

慈眼山遺跡以外の周辺の遺跡をみてみると、今回の5次調査地の東の丘陵上には中世の山城跡である堤城跡が存在し、その南方には縄文時代から近世にかけての複合遺跡である赤追遺跡、円筒埴輪や形象埴輪などが出土している葦薈堂山古墳や丸尾神社古墳がみられる。北東に広がる佐寺原台地上には弥生時代の集落が確認された佐寺原遺跡が存在する。南には弥生時代から古代の集落が確認されている日田条里飛矢地区、日田条里大原地区がみられる。また、西には重要な伝統的建造物群保存地区に選定されている豆田の町並みが広がり、伝建地区の南に廣瀬淡窓が開いた私塾跡である史跡成宜園跡、その北方の残丘には近世に永山城が築かれ、その崖面には古墳時代の多数の横穴墓、月隈横穴群が存在している。また、その麓には江戸時代に代官・西国筋郡代が置かれた水山布政所がみられる。このように大波羅遺跡周辺では、先史時代から近世にかけての人々の痕跡が窺えるとともに、中世から近世にかけては日田の中心的な位置であったことを示す施設が残されている。

(今田)

### 【参考文献】

- 中島国夫 1974「日田盆地のなりたち」『日田市30年史』日田市
- 田中裕介編 1991『慈眼山遺跡』大分県文化財調査報告書第85輯 大分県教育委員会 種慈眼山遺跡2次
- 坂本恭弘 1992『慈眼山 深戸口遺跡』一公民務員合同宿泊日田住宅2号棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報一 大分県教育委員会 種慈眼山遺跡3次
- 千田 畿 1992「日田・玖珠地域の地形 一とくに台地地形についてー」『日田・玖珠地域一自然・社会・教育ー』大分大学教育学部
- 行時志郎 2000『土ノ馬場遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第23集 日田市教育委員会 種慈眼山遺跡4次
- 後藤宗俊 2001「I部 1章 古史・古代の日田地方の開発と交通」『環境歴史学の視点に立つ都市及び農村の開発史的研究 大分県日田盆地における開発史的研究』別府大学
- 飯沼賀司 2001「I部、2章 古代から中世における日田盆地の自然環境と開発」『環境歴史学の視点に立つ都市及び農村の開発史的研究 大分県日田盆地における開発史的研究』別府大学
- 園田大 高陽一 三谷恵平 2009「第5章(5) 考察 大原神社における祭祀共同体と地形的環境との関わりについて 一同一尾根地形上に見られる祭祀施設の存在位置に注目してー」『求来里の遺跡Ⅰ 一町ノ坪遺跡B区の調査報告ー』日田市埋蔵文化財調査報告書第88集 日田市教育委員会
- 高陽一 飯沼賀司 2009「第5章(5) 考察 大原神社における祭祀共同体と地形的環境との関わりについて 一同一尾根地形上に見られる祭祀施設の存在位置に注目してー」『求来里の遺跡Ⅰ 一町ノ坪遺跡B区の調査報告ー』日田市埋蔵文化財調査報告書第88集 日田市教育委員会
- 渡邊隆行 2001『大波羅遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第29集 日田市教育委員会 種大波羅遺跡1次
- 村上久和 由本恭弘 2001『大分地方法務局日田支局新館に伴う埋蔵文化財調査報告書 大波羅遺跡』大分県文化財調査報告書第116輯 大分県教育委員会 種大波羅遺跡2次
- 土居和幸 2004『大波羅遺跡3次』日田市埋蔵文化財調査報告書第54集 日田市教育委員会
- 豊田寛二監修 2006『図説 中津・日田・玖珠の歴史』株式会社郷土出版社
- 矢羽田季安編 2007『大波羅遺跡4次』日田市埋蔵文化財調査報告書第74集 日田市教育委員会
- 渡邊隆行 2007『慈眼山遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第75集 日田市教育委員会 種慈眼山遺跡5次
- 行時桂子 2008『慈眼山遺跡II』日田市埋蔵文化財調査報告書第84集 日田市教育委員会 種慈眼山遺跡6次
- 渡邊隆行 2010『慈眼山遺跡7次』日田市埋蔵文化財調査報告書第95集 日田市教育委員会

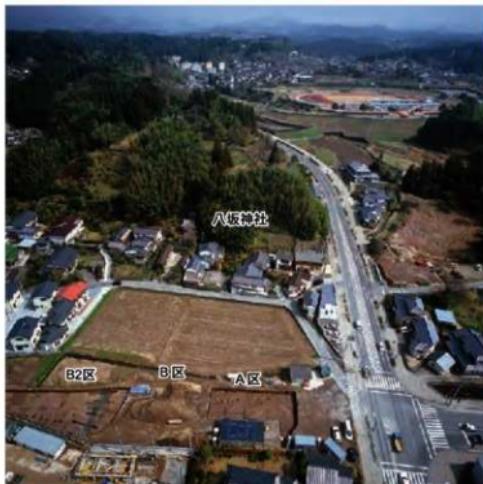
### III 調査の内容

#### (1) 平成20年度の調査

##### 1. 調査区の位置

調査区は大波羅遺跡 1 次調査地の北の続き、城町高瀬線と友田大原公園線の交差点の北側で、今回の工事区間の南端にある。調査前は水田や畠として利用されており、一部その水田を近年埋め立てて事務所などが建っていた。この辺りの水田は友田大原公園線の路面に比べて 1mほど標高が低く、この調査地周辺から北方に存在する慈眼山の麓まではこのような低地が広がっており、地元の方が「レンコン田」「じる田」と呼称するほど、水はけが悪く地下水位の高い土質であったようである。

調査は工事等の都合により南から A・B・B2 区の 3 つに分け、B 区→B2 区→A 区の順に実施した。以下、検出された遺構の内容に基づき、A・B 区と B2 区に分けて記述する。



A・B2区遠景（西より）B2区は調査終了後。

##### 2. A・B 区の概要

A・B 区で検出された主な遺構は、大型柱穴列 2 列、掘立柱建物跡 1 棟、溝 2 条である。これらは調査区中央を南北に流れる溝を挟んで東側に大型柱穴列 2 列が、また西側に掘立柱建物 1 棟が存在するという、興味深い配置となっている。

大型柱穴は一辺 1m 前後の方形または長方形を呈し、調査区内では 24 基確認され、南北方向に東側 11 間 +  $\alpha$  と西側 11 間の 2 列をなしている。東側を 1 号大型柱穴列とし、西側を 2 号大型柱穴列とする。柱穴列は心地距離で約 2.5m～3.2m の距離をもって並列しているように見えるが、若干北に向かって開き気味となっていること、建物にしては列どうしの間隔が狭いこと、列毎に柱木の立て方（埋土）に違いが見られること、また列内で隣り合う柱穴はほぼ距離が一定であるが列同士では柱穴間隔が不揃いであることから、2 列が同時に存在した可能性は極めて低いと考えられ、同一の構造物とは想定できない。

なお 1・2 号大型柱穴列を構成する柱穴の約 7 割には柱木（または木質）が残存していた。遺構検出面付近では風化が進んでいたものの、柱木の根本付近は非常に良好に残存しており、整形のノミ痕が観察できる。またほとんどの柱木には運搬用と考えられる「エツリ穴」が穿たれている。柱木の長さは 46～109cm と様々であるが、太さは太いもので約 34cm 現存しており、外側から腐食して土化した部分を考慮すると、径 30～40cm ほどあったものと思われる。樹種同定の結果 1 本（クリ）を除くすべての柱木は針葉樹のカヤ（榧）であることが判明し<sup>(1)</sup>、年輪数から樹齢 200 年以上の大木を使用していることが分かった<sup>(2)</sup>。

2 号大型柱穴列の西には、調査区を柱穴列と並行して南北に流れる 1 号溝が存在する。この溝は A 区中央で南端となり、北は B2 区の 2 号溝に注ぐ。A・B 区内では浅い皿状の断面であるが、北向きにしだいに深くなり、2 号溝に注ぐ直前では V 字形のしっかりした形状となる。

掘立柱建物跡は2間×5間で四面庇を持つと考えられ、2号大型柱穴列や1号溝とほぼ並行している。この掘立柱建物跡の柱穴は径約70～80cmと大型柱穴列に比べて小さく、また円形を呈するなど、規模・形状において両者は大きく異なる。また掘立柱建物跡のいくつかの柱穴からも柱木が出土しているが、樹種はケヤキやクリ、モミ属と様々であり、1号溝を挟む両者の構造物には規模のみならず、樹種においても大きな差異が認められる。



▲A区空撮（真上から）  
画面上が南。  
画面下にB区が続く



▲B区空撮（真上から）  
画面下にB2区が続く  
※写真中のA・B・C・Dは、14・  
15・25頁の柱穴のA・B・C・D  
の位置を示す。



B区大型柱穴列（北から）

画面左が1号大型柱穴列、右が2号大型柱穴列。表土除去段階で既に柱木が露出していた。



B区溝・掘立柱建物跡（北から）

上の写真の柱穴列が画面左にあり、溝を挟んで右に底付の掘立柱建物が展開する。



大型柱穴（1号大型柱穴列A）検出状況  
柱木のまわりを人頭大の川原石で固めている。



大型柱穴（2号大型柱穴列B）検出状況  
左の写真と異なり、柱木のまわりにあまり川原石は見られない。



大型柱穴（1号大型柱穴列A）半裁状況  
柱穴の底部からも川原石が見えている。



大型柱穴（2号大型柱穴列B）半裁状況  
柱穴内にも川原石は見られない。柱木のまわりには粘質土と砂質土で交互に埋められている。



大型柱穴（1号大型柱穴列A）完掘状況  
柱木の根元も頭丈に川原石で根固めされていたが、柱木の下に礎石は存在しない。



大型柱穴（2号大型柱穴列B）完掘状況  
柱木の根元にも石は見られず、左列の柱穴との大きな差異が感じられる。下方に2つの「エツリ穴」が見える。



2号大型柱穴列C遺物出土状況（矢印）

基本的に柱穴からはほとんど遺物が出土しないが、この写真のように柱木の傍に土器が埋められているものがある。



1号溝遺物出土状況

溝の南部は浅いものの、土師器や須恵器が出土した。



2号大型柱穴列C出土転用硯（横・裏）

上段写真の柱穴から出土した須恵器。内面に磨られた痕跡があり、蓋を硯として利用したものと思われる。



A区出土朱墨転用硯

日常容器を硯として利用したものの中には、墨だけではなく朱墨が付着したものがある。朱墨の例は、市内では大肥吉竹遺跡（大字大肥）でも見られる。



◀ 1号溝出土土師壺



◀ 1号溝出土ミニチュア土器

溝からはこのようなミニチュア土器も出土した。水辺の祭祀に使用されたものか。

### 3. B2区の概要

B2区で検出された主な遺構は、溝、土坑、柱穴などである。A・B区で見られた大型柱穴列の続きが期待されたが、この区までは続いていなかった。

調査区の南端近く、B区の大型柱穴列の北端から約6m北に、大型柱穴列の領域を区切るように、調査区を東から西に向かって流れる幅約6mの溝（2号溝）がある。溝は断面皿状を呈し、埋土は粒子の細かい粘質土と砂層で、A・B区同様地下水位が高いため、埋土中からは土器などの遺物とともに木製品や流木などの有機質遺物が出土した。有機質遺物にはヒノキなどの板材の破片に混じってカヤの木屑が見られ、あまり損傷を受けていないことから、流れてきたものではなく、その場で削って埋設したものと考えられる<sup>(3)</sup>。

なお、この溝を東に遡ると、丘陵麓に八坂神社<sup>(4)</sup>が存在する。神社裏の崖面では今でも少量ながら水が湧いており、地元の方によれば、かつてはかなりの水量があったとのことである。神社そのものは後世のものとしても、この湧き水を利用して溝を引き、大型柱穴列の領域を区画した可能性が考えられる。

この溝の北側の西寄りで柱木（クリ）のある柱穴が数個、また調査区の西壁に柱木（タブノキ）のある柱穴が見つかっている。クリの柱穴はB2区内では並ぶものの次年度調査区であるC区では続きが確認できず、詳細は不明である。タブノキの柱穴は他に対になるような柱穴が見つからず、こちらも詳細不明と言わざるをえない。

（行時）

#### 【註】

- (1) 佐々木由香氏・光谷拓実氏のご教示による。
- (2) 藤根久氏・佐々木由香氏のご教示による。
- (3) 佐々木由香氏のご教示による。
- (4) この八坂神社は、市内に3つある八坂神社でも最も古いといわれている。祇園社とも呼ばれ、祭神は素戔鳴命。



B2区空撮（真上より）画面左にB区、右にC区が続く

A・B区で見られた大型柱穴列は大きな溝（2号溝）の左にしか見られない。2号溝は大型柱穴列の領域を区切るものとして意識されていた可能性がある。



柱木出土状況

2号溝の北にある柱穴列の柱木。A・B区で見られた大型柱穴に似るが、規模は小さい。柱木の樹種はクリ。



調査区西壁柱木検出状況

周辺土層の精査により、柱穴であることが分かった。柱木の樹種はタブノキ。



2号溝全景（東より）

調査区を東西に横断する大溝。東に遡ると神社があり、社殿の裏手の屋面からは今も水が湧いている。この湧水を引いてきたものか。



2号溝遺物出土状況

土中に水分を多く含むため、木製品を含む有機質遺物が多く出土した。埋土中にも種実や種子、花粉が大量に残されていた。



2号溝上層出土壺



2号溝出土転用硯

須恵器の杯や蓋を硯として使用したもの。内面に磨られた痕跡が残る。



2号溝上層出土壺

2号溝の下層ではA・B区の大型柱穴列と同時期の遺物が出土するが、上層では9世紀ごろの土器が出土した。溝としては長期間機能したようである。



2号溝出土朱墨転用硯

須恵器だけでなく土師器も硯として利用されたようである。

## (2) 平成21年度の調査

### 1. 調査区の位置

この年の調査区は、前年度調査を行ったA・B・B2区の北側及びB2区の西隣である。

調査範囲南側の標高約91.3mの低地部分のC区は、その南側のB2区と境を接する位置が低湿地となっていた。調査範囲北側のD区は、東から西に延びる微丘陵の尾根上に位置し、標高約92.7mとC区との高低差は調査時の状況で1m以上あった。

C区の北側は、本来D区の位置する尾根の緩斜面部であったとみられるが、後世の耕地造成やグランド造成の際に、C区南側の低地部分に合わせ大きく削平されたためか、遺構はあまりみられなかった。

D区の北方には、現在市道が東西に横切っているが、現況および事前の予備調査などから、この市道部分は本来深い谷部であったとみられ、

この谷に落ちる緩斜面部となる市道とD区の間には、明瞭な遺構は窺えなかった。



C・D区遠景（上空より）黄色枠み部分が調査地。



C・D区遠景（西より）写真手前にあるグラウンドの奥がC区。その左手がD区（撮影時は未調査）。



C区全景（上空より）



C区柱穴群近景（東より）



C区の遺構配置状況▲

▲柱穴（P 8）  
90cm×80cmの方形の柱穴である。  
残存していた柱木から、直径23cm  
はどの柱であったとみられる。

◀柱穴（P 8）内出土須恵器蓋  
内面には墨とみられるものが付着して  
いることから、窯に転用されていたこ  
とが窺える。





柱穴（P 4）

平面形が、一辺60cmほどの正方形に近い柱穴である。遺されていた柱木から、柱は直径14cm程度であったとみられる。



柱穴（P 7）

平面形が、46cm×42cmほどの方形の柱穴で、遺されていた柱木から、柱は直径14cm程度であったとみられる。



◆2号溝の木材等出土状況

C区においても、B2区と同様に、自然木はもとより、加工痕跡の覗える木材や種実など、多くの植物遺存体を得ることが出来た。



D区全景

### 3. D区の概要

ここでは、多くの柱穴と溝や土坑が確認された。

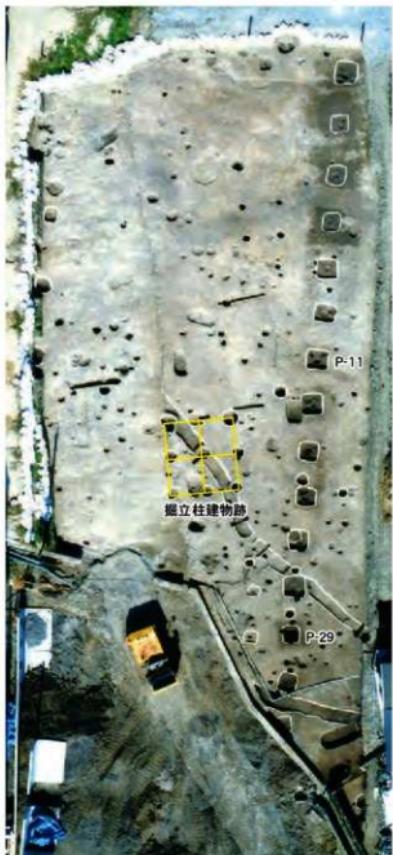
柱穴に関しては、C区と同様に方形のものと円形のものがみられた。ここでも過去の水田造成時に大きく削平を受けており、柱穴の深さは残りの悪いもので0.5cm程度しかなかった。このためか、建物等構造物の配置が揃めたのは、調査区東側において1列に並んで検出された一辺70～90cmの方形の大型柱穴列と掘立柱建物跡1棟のみであった。時期的には、やはり柱穴群からの遺物は少ないものの須恵器などから古代の所産とみられる。

このほか、柱穴群に切られる状態で溝1条と土坑1基が確認され、それらからは弥生土器が出土した。



D区柱穴群近景▶  
（西より）

手前中央に掘立柱建物跡。そのおくには南北に並ぶ方形の大型柱穴が並んでいる。



◆D区の  
遺構配置状況  
(北側一部除く)



◆掘立柱建物跡  
2間×2間の総柱建物跡で、3.4m×3mの規模である。柱間距離は1.5~1.7mで柱穴の平面形は円形で直径50cm~70cmであった。



▲大型の方形柱穴列（北から）  
一辺70~90cmの正方形に近い大型の方形柱穴が南北に1列に並んで検出された。



◀柱穴（P-11）  
平面形が、88cm×84cmほどの方形の柱穴で、土層の断面観察から、柱は直径22cm程度であったとみられる。



▲柱穴（P-29）  
平面形が、80cm×70cmほどの方形の柱穴で、土層の断面観察から、柱は直径25~33cm程度であったとみられる。

### (3) 平成22年度の調査

#### 1. 調査区の位置

この年の調査区は、前年度調査を行ったD区の北側に位置する。

D区の北方には、市道が東西に横切り、さらにその北方には県道が同じく東西に走っており、その間がこの年の調査区のE区となる。調査区の北側の県道部分は調査区の北東にそびえる佐寺原の丘陵から延びてくる尾根の縁辺にあたり、本来浅い谷であったとみられる市道部分に比べると標高差は約1mと高い。調査区内においても、やはり市道より南側は標高約91.5mと低く、明瞭な造構は見えず、北側の標高92.5m前後の高い位置に多くの造構がみられた。

E区遠景（上空より）▶  
黄色囲み部分が調査地。



▼E区遠景（南より）



## 2. E 区の概要

ここでは、多くの柱穴と井戸1基、土坑7基などが検出された。柱穴は円形で、前年度までのものとは様相が異なり、その径も30~50mと小さい。柱穴からの出土遺物は少ないが、土師質土器や白磁皿などの破片がみられ、これらが中世の所産であることが窺えた。土坑や井戸についても、土師質土器などの出土遺物から、柱穴群と同時期の所産とみられる。5・6号の2基の土坑については、土師質土器が埋納された状態で出土しており、その状況から地鎮に伴うものと想定される。また、今回の調査区では、大型の4号土坑から風炉、井戸から茶臼片と、いわゆる茶道具類が出土したことが注目される。なお、調査区の大部分では自然流路の痕跡が確認されており、検出された遺構群が形成される以前の調査地は、水が流れているような場所であったことが窺えた。

(今田)

E 区近景 ▶  
(北より)



E 区全景（上空より）



E 区の遺構配置状況



柱穴（P-79）

直径40cmほどの円形に近い柱穴である。埋土中には白磁皿片や土師質土器片が含まれていた。遺されていた柱木から、柱は直径15cm程度であったとみられる。



柱穴（P-80）

44cm×37cmほどの平面がやや楕円形に近い柱穴である。遺されていた柱木から、柱は直径18cm程度であったとみられる。



5号土坑

確認面で110cm×130cmほどの規模の不整形を呈す土坑である。中には完形の土師質土器の环が4点出土した。うち1点は伏せた状態で出土し、その中には炭化した種子等が数多く含まれていた。



6号土坑

確認面で80cm×55cmほどの規模の椭円形を呈す土坑である。ここからは完形の土師質土器の环が2点出土した。



井戸

石組井戸で、石組枠の直径90cm×80cmとやや楕円形を呈している。



4号土坑

確認面での規模は200cm×250cmで不整形を呈し、断面はやや袋状をなしている。ここからは多くの土師質土器や瓦質土器が出土した。また、伏せた状態で出土した1点の土師質土器环の中には炭化した種子等が数多く含まれていた。



井戸から出土の茶臼片



4号土坑出土の瓦質土器風炉

## IV 小 結

大波羅遺跡5次調査では、縄文時代から中世にかけての遺物が出土し、遺構では、弥生時代の土坑1基と溝1条。古代のものとしては、方形の大型柱穴列（A・B区で2列、D区で1列）、掘立柱建物跡2棟、溝3条、そして柱穴群。中世のものは、井戸1基と土坑7基、そして柱穴群が検出された。



2号大型柱穴列Dの柱木（カヤ）

取り上げ時の柱木を撮影したものである。長さ約109cm、最大径約29cm、根元付近に運搬用と思われる2つの「エツリ穴」が見える。

今回の調査の中心となったのは、古代および中世の遺構群である。古代の遺構の主なものとしては、A・B区の大型柱穴列・1号溝・四面庇付の掘立柱建物跡、B2区の2号溝、D区の大型柱穴列があげられる。特にA・B・B2区では平面方形～長方形を呈する大型柱穴列と、平面円形を呈する柱穴で構成される掘立柱建物跡が、1号溝により東西に分断され、さらに大型柱穴列は2号溝を北限とするなど、計画的な配置がうかがえる。遺物としては土師器や須恵器などが主に溝から出土しており、大型柱穴列やその他のピットなどからの出土量はごくわずかである。溝の下層および大型柱穴列その他のピットからの遺物は概ね8世紀中頃～後半と考えられ、2号溝の上層では9世紀代と思われる土師器が出土している。これらのはか、遺跡の立地する場所は水分を多く含む地質であるため、大型柱穴列をはじめとする柱穴・ピットには柱木や木質が多数残っていた。特に大型柱穴列出土のものはほとんどが通常は建築材として使用することの少ないカヤ材<sup>(1)</sup>であり、遺構そのものや出土遺物<sup>(2)</sup>など、今回の調査で検出されたものはあらゆる点において特殊な属性を持った遺構群といえる。さらにA～D区全体で見ても、溝以外の遺構からの出土遺物が調査面積に比してきわめて少なく、今回調査した大波羅遺跡が通常の集落遺跡ではないことを暗示しているようでもある。以上の結果をまとめると、今回発見された遺構群は官衙的要素を十分に備えた遺跡である可能性が高いと考えられる。ただし道路幅分しか調査できなかつたため、特に大型柱穴列がどのような性格を持ち、どう展開するのかについては、現段階では不明といわざるを得ない。周辺における今後の調査が待たれるところである。

中世の遺構は、E区において柱穴や土坑などが検出されている。柱穴の一部には柱木が残されていたものの、後世の水田・宅地造成の影響もあってか、それらの建物等構造物の配置を掴むことは出来なかった。埋納土坑である5・6号土坑は、土師質土器窯の出土状況から地鎮に伴うものと考えられる。両土坑の埋土の中には灰とみられる層が入っており、5号土坑の中の灰のうちの一つには多くの炭化種子が含まれ、当時の祭祀の一端を窺える資料といえよう。これらE区の遺構の時期は、土師質土器から15世紀後半から16世紀初頭<sup>(3)</sup>と想定される。また、それらの遺構が形成される前、このE区調査地の大部分が自然流路であったことが調査で判っていることから、この頃に自然流路の要因となった水を制御・管理し、土地開発を行っていったとみられる。ここで特筆すべき事象として、井戸から茶臼、4号土坑から瓦質土器風炉が出土したことが挙げられる。これら茶道具の存在は、この時期の日田に喫茶文化が存在したことを確証付けるとともに、E区調査地およびその周囲が、階層的に上位の人物の居住域ないしは寺院関係の領域であったことを想像させる。このE区調査地に関しては、今後、北に接する慈眼山遺跡の成果、そしてその性格とも合わせて検討していく必要があるろう。

（行時・今田）

### 【註】

(1) 大波羅遺跡5次調査により出土した柱木については、そのすべての樹種同定を行っている。今回の概要報告書では、その成果を参考に樹種の記述を行っているが、それら樹種同定の結果報告については、正式報告書刊行の際に掲載する予定である。

(2) A～C区からは、白色または緑色の玉砂利が複数出土している。これら玉砂利の存在は、調査地の近辺に、それらを敷くような施設があったことを窺わせてくれている。

(3) 渡邊隆行氏・若杉竜太氏・田中裕介氏・後藤一重氏にご教示を得た。



5次調査出土玉砂利

B2・C区の2号溝やA区などで出土したもので、白色または緑色をした扁平で光沢のある小石である。大きさは長軸が1.4～1.8cmほどである。

## 報告書抄録

ふりがな 書名	おおはらいせき 大波羅遺跡
副書名	5次調査の概要
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第100集
編著者名	今田秀樹 行時桂子
編集機関	日田市教育文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1 TEL 0973-24-7171 (直通) FAX 0973-24-7024
発行年月日	2011年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
おおはらいせき 大波羅遺跡 (5次調査)	B区	おおいたけん ひた し 大分県日田市	44204-6 204147	33° 19' 25"	130° 56' 42"	20080522 ~20080909	478m <sup>2</sup>	記録保存 調査
	B2区			33° 19' 25"	130° 56' 42"	20081127 ~20080323	488m <sup>2</sup>	
	A区			33° 19' 24"	130° 56' 42"	20090217 ~20080323	263m <sup>2</sup>	
	C区			33° 19' 26"	130° 56' 41"	20090804 ~20090915	604m <sup>2</sup>	
	D区			33° 19' 28"	130° 56' 42"	20090910 ~20091126	469m <sup>2</sup>	
	E区			33° 19' 31"	130° 56' 41"	20100616 ~20100903	673m <sup>2</sup>	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大波羅遺跡 (5次調査)	官衙 集落	古代 中世	大型の方形柱穴列 掘立柱建物跡 溝 土坑 遺物包含層	調文土器 弥生土器 土師器 須恵器 土師質土器 瓦質土器 石器 柱木	<ul style="list-style-type: none"> <li>A.B.D区では、調査区の東端において大型の方形柱穴が並んで確認された。</li> <li>調査地の一部は低湿地であり、柱木などの木材や種火や花粉など多くの植物遺存体が確認された。</li> <li>E区の井戸や土坑から、茶臼や風炉が出土し、中世の喫茶文化の存在が窺えた。</li> </ul>

要約	<p>大波羅遺跡は、日田盆地東部の沖積面に所在している。          今回の5次調査では、縄文時代から中世にかけて遺物が出土し、調査地及び周辺を該期の人々が大いに利用していたことが窺えた。</p> <p>6区画に分けを行った調査で中心となったのは、古代および中世の遺構群である。          古代のものとしては、A～D区において掘立柱建物跡や溝、そして並んで検出された方形の大型柱穴列などが検出された。これら遺構の時期は、出土遺物から概ね8世紀中頃～後半と考えられる。大型柱穴列については、調査区の東端に並んで検出されたため、これらがどう展開するのか、というった性格のもののかは現段階では不明である。しかし、これらの存在より、調査地が官衙の要素を十分に備えた遺跡であり、その一帯が古代の日田において中心的な位置だったことが想定される。</p> <p>中世のものとしては、E区において井戸や土坑、そして多くの柱穴が確認された。これら遺構の時期は、出土遺物から15世紀後半～16世紀初頭と考えられる。ここでは、井戸から茶臼、4号土坑から瓦質土器風炉が出土し、この時期の日田における喫茶文化の存在を窺えたとともに、調査地およびその周囲が、階層的に上位の人物の居住城ないしは寺院関係の領域であったことが想像された。</p>

<h3 style="margin: 0;">大波羅遺跡</h3> <p style="margin: 0;">—5次調査の概要—</p> <p style="margin: 0;">2011年3月25日</p> <p style="margin: 0;">編集 日田市教育文化財保護課 〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1</p> <p style="margin: 0;">発行 日田市教育委員会 〒877-8601 大分県日田市田島2-6-1</p> <p style="margin: 0;">印刷 尾花印刷有限公司</p>
---



日 田 市